かげに隱されしとぞ、いとありがたきことゞもなり、

〔雲室隨筆〕旭山澤元愷、字悌俟先生、世名平澤五助、山城國宇治の人なり、古昔宇治菟道と書せり、依て人皆菟道先生と稱せり、此人秀才之人なれ共、其質甚短慮にてありし、文を以世に知られたり、文章は實に拔群と可申、然ども生質右之通之人故、自身に應ずる才子ならざるよりは喜ばず、才なき人をば甚敷惡み、叱罵言せらるゝ、故人親まず、厭惡するもの多し、予〇僧雲室も常に芥の如く罵言せられり、然ども風流は實に天下一人と云べし、事は著述の漫遊文章にて、人の知る所なり、〇下略

〔やしなひ草二篇〕拙者生得短氣にて、腹立ときは迹さき見ず怒り罵り、科なき諸道具を投ほうり、杖ぼうを振上たり、拳に息を吹かけたり、燃立ときは火に入るもしらざれ共、そろ〳〵短氣しづまれば、其後悔亦甚し、後悔も我、短氣もわれ、後悔する短氣ならば、發さぬが能といふ人あれば、おれが發し度て發す短氣が、生質なれば是非なしと、また短氣發る、是にも醫者のあるべきや、御考給はるべし、〇下略

〔淺瀨のしるべ〕短氣はそんき

人はものねんじして、のどやかなるぞよき、ことわざしげき世にふれば、にくげなることいひかくる人のありて、めざましう心やましとおもふふしありとも、ひたおもてにあらはさず、見しらぬさまして、心にその人をうとみてたりぬべし、なまはらだちやすく、おもひのまゝにいひもし、なしもしては、すこし心のどまりて、くやしうおもうことぞおほかるべき、ねぢけがましからでも、いときふにのどめたる所なきは、よからぬ人ぞかし、さては人をも身をもそこなひぬべし、またものまなぶ人のふみ見るも、卷の數おほくておもしろからぬを、ねんじつゝよめば、よきことのあると、心みじかく見さしてやみては、いたづらごとゝなりぬべし、